

AIDS UPDATE

No.36 2003.2.7

広島大学医学部附属病院

エイズ医療対策室

内線5581（輸血部長室）

Internet: www.aids-chushi.or.jp

エイズ拠点病院医療従事者海外実地研修 (サンフランシスコ看護師コース)を終えて

9階西病棟看護師 木下 一枝

アメリカのテロ事件以来、一年越しの参加となった研修でしたが、「待った甲斐があった！」と思える、非常に有意義な研修でした。その内容についての報告は、別の機会に譲ることにして、ここでは私が研修を受けて印象に残ったことを2点ほど述べたいと思います。

まず驚いたのは、なんと言ってもエイズ医療が非常に充実していることです。病院だけでなく、行政・地域が一体となってHIV感染症の予防と治療に取り組んでいます。1つ例をあげると、経済的事情で治療継続が困難な方や、コンプライアンスの低い方たちに対して、“ご褒美”を設けて、治療への参加を促すシステムが存在します。それは、「患者は、薬の供給所（抗HIV薬の配布プログラム）を訪れる」「そこに準備されている自分の薬を内服する。またコンドームなどを受け取る」「その努力の代償として、お金や食べ物患者に支給される」というものです。このプログラムに資金を投入することで、二次感染やエイズの進行を防ぐことができ、結果として医療費の削減につながるというわけです。この合理的な考え方には、驚くと同時に感心させられました。

次に、「エイズはゲイの人が罹る病気」という先入観が、アメリカでもまだ少なからずあります。HIV感染は、ゲイという性的指向（Sexual Orientation）によるのではなく、性的行為（Sex）によって起こるものだと認識し、ゲイの方々への偏見を改めなければなりません。しかし、感情面の問題などから、自分と違う性的指向を理解することが難しく、偏見を無くすことが容易ではないこともまた事実です。HIV感染症は、STDという性質上、その方のセクシャリティについて避けて通れない部分があります。今回の研修では、このセクシャリティについて学ぶ機会

があり、その結果、今までの私の考え方は大きく変わりました。私は自分自身のことを、「正真正銘、絶対に異性愛者だ！」とっていました。皆さんの中にも、そう思っておられる方が多いと思います。しかし本当にそうでしょうか？私は、あるテストをやってみて、“絶対”とは言い切れない結果に、ショックに近い驚きを感じました。そして同時に、同性愛や両性愛について、少し理解できる気持ちになりました。このことは、今後HIV診療に限らず、自分と異なる性的指向を持つ方への偏見や困惑を減らし、より一層、患者様の気持ち・立場に立った診療看護を行っていくための助けになると思います。この「性的指向/性別自己認識テスト」は、1分少々でできるごく簡単なものです。興味のある方はお教えしますので是非どうぞ。今まで気づかなかった自分の性的指向が発見できるかもしれません。

広島大学病院はエイズ治療のためのブロック拠点病院であるため、毎年、厚労省からエイズ研修のために海外研修枠があります。今回、2002年度で木下さんがサンフランシスコに2週間行かれ、その感想文をお願いしたものです。[TAKATA]

☆ 職員エイズ研修会 ☆ 「血液介在性感染症のインパクト その予防と対策」

標記タイトルでブロック拠点病院の職員研修として、講演会を開催します。本会は病院の感染症対策委員会との共催となります。講師は富山医科薬科大学感染予防医学教室の安岡 彰助教授です。安岡先生は国立国際医療センター・エイズ治療研究センターで臨床の第一線で活躍されてこられました。HIVに限らず肝炎ウイルスなど血液介在性感染症についても広く教えて頂く予定です。

< ご意見募集 >

「AIDS UPDATE」は今後も不定期に発行します。ご意見やご希望がありましたら輸血部までお寄せ下さい。 [TAKATA, OE]

takata@aid-chushi.or.jp